

Glocal Tenri

Newsletter

月刊 **グローバル天理** Monthly Bulletin Vol.4 No.4 April 2003

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University



4

巻頭言

「強い者は弱い、弱い者は強い」

アフガン・イラク戦争に思う

おやさと研究所長 井上昭夫 Akio Inoue

イラク攻撃が始まった3月20日の翌日は、アフガニスタンやパキスタンなど四季のあるイスラーム圏では新年を祝う。米国は大晦日から正月にかけて、イラク侵攻を開始したわけだ。そのとき筆者はカブールにいた。

正月2日目にあたる3月21日、カブールでは実に5年ぶりに雨らしい雨が降った。市中を走る車の大半が日本製の中古車である。車の排気ガスのすごさはいつもと変わらないが、ほこりまみれの樹木は久しぶりにシャワーで洗われ生き返ったように見えた。大地は雨のおかげで砂埃を巻きあげず、快晴で実に清々しい日であった。驚喜したのは水不足に悩む農民たちであったろう。「りゆうけつければ水がほしかる」(ふ13-101)というお言葉が胸に迫った。対照的に、筆者が宿泊した報道陣に人気のあるムスタファ・ホテルで放映されている、アルジャジーラをはじめとする国際テレビ番組は、イラクの砂漠を猛烈に吹き荒れる砂あらしに苦闘する米軍の様子を報道していた。

アフガニスタンに平和が訪れているわけではない。逆に、イラク戦争を契機にして民間外国人も標的にしたタリバンによるゲリラ戦が活発化している。特に南部と東南部ではテロ活動が増えているが、3月27日には中部のウルズガン州ではタリバンとアメリカ特殊部隊が戦闘を行い、赤十字国際委員会の職員が射殺されている。国際テロ組織アル・カーイダは、イスラム原理主義者のホームページで「アメリカはアフガンでの失敗の代わりにイラク戦争を始めた。国際治安支援部隊 (ISAF) はタリバンとアル・カーイダの剣にまみえることになる」と警告している。ISAFとは首都カブールの治安を守る軍隊のことである。米軍が圧倒的な武力でバグダッドを物理的に占拠し、一時勝利宣言を行っても、試練は終わったのではなく、本当の試練はこれから始まるだろう。さまざまな意味を込めて「強い者は弱い、弱い者は強い」(さ20/12/4)という神言が思い出される。

今回のアフガニスタン訪問は、おやさと研究所の自然・人間環境学研究室が中心となって推進している、天理エコモデル・デザインセンターのアースバッグ・シェルター、そしてチェックダムや井戸掘りなどといった住居・水資源確保の試みが、天理大学地域文化研究センターの「国際参加」プロジェクトを通して、アフガニスタン難民村でも適応できないかという可能性を調査するためであった。世界から数多くのNGOがさまざまな領域で恵まれない人たちのために汗を流している。その人たちとの協働も視野に入れてい

る。

3月7日から2週間、天理大学の学生8名(内女性5名)他教員3名と造園家など4名のスタッフを加えた計15名がインドに赴き、昨年建設した土嚢シェルターの横に、現地のNGOの人たちと新たに少し大きめのシェルター1棟を完成した。隣接する村の質素な小学校の図書館として利用される予定である。第1回隊がつくったシェルター2棟の横に、造園家グループはインドではめずらしい日本庭園を造った。このアンキット村で2001年の夏に植えた竹はすでに背高く茂っており、今回持参した孟宗などの5種類の竹は石庭とシェルター2棟の中間に植樹した。将来が楽しみである。繁殖すれば、これらの竹は建材や家具の素材としても利活用され、筍は食料となる。

灼熱のデリーを3月17日にアリアン・アフガン航空で発ち、冬のカブールに向かった。予定どおりに到着したのはありがたかったが、冬着と竹の根を梱包したトランクが出てこない。震えながら準難民になったつもりで、旧知のマンガール・フセイン大臣のところに行きたすけを求めた。早速秘書にバザールに案内してもらい、冬物を手に入れた。2米ドルで購入した長ズボン代わりの古着のトレパンには、日本語で学生の名前が縫われていた。荷物は1週間後、デリーへ出発直前カブール空港で出てきたので、あわててトランクを開け、竹の根この包みを見送りの英語の分かるカブール大学生シャフィーク君に渡して、先に面談しキャンパス植樹の了解を得ていたA・ポパール学長に届けてもらうことを約束、一安心して機上の人となった。離陸は7時間も遅れどころか心配したが、こういうことに慣れているのか悠然として待ち続ける他の乗客の姿には感心させられた。

カブールの北部30kmあたりにソマリ平野が広がっている。この地域は戦争以前は有名なブドウの産地であった。しかし、タリバンが農家に敵が潜伏するのを防ぐために、ブドウ畑も、カレーズ(地下水路)も、村落も徹底的に破壊してしまい、くずれた土の家が、あたかも古代遺跡のような姿で残っていたのが非常に印象的であった。この地方にも農民が少しずつ帰還しはじめているが、ブドウを再生し、生きるためにはまず水が必要となる。そこで、水の流れていないカレーズの復活が生活再建の必須条件となる。この夏は、せめて1本でもこのカレーズの修復に向けて「一に百姓たすけたい」と思召される、教祖の思いに一步近づかせて頂きたいと考えている。